

機関番号：13103

研究種目：基礎研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520376

研究課題名 (和文) 「だけ」を含む否定文の獲得について

研究課題名 (英文) On the acquisition of negative sentences with *dake*

研究代表者

野地 美幸 (NOJI MIYUKI)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：40251863

研究成果の概要 (和文)：

本研究の成果としては、まず「だけ」が主語もしくは目的語に付いた否定文に対して日本語児が大人と同様に別個の解釈を与えることができるということが明らかになり、幼児の日本語文法でも「階層的な」構造が形成されていることが示唆された。また、「だけ」が与格目的語に付いた否定文に対して日本語児が「だけ」が否定辞より広い作用域を取る解釈と狭い作用域を取る解釈のどちらも与えることができ、選好効果を示さなかったことから Musolino and Lidz (2006) の同形読み初期値 (Isomorphism by Default) 説というよりは Hulsey et al. (2004) 等の問答要件 (Question Answer Requirement) 説が支持されることを示した。L2 日本語に関しては、日本語の主格目的格構文の獲得において L1 の効果が見られることが明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：

The present study revealed first that Japanese-speaking children, just like adults, can assign different interpretations to negative sentences with *dake* attached to a subject or an object, which suggests that not only adult Japanese but also child Japanese builds configurational structures. Another finding is that Japanese-speaking children can assign both surface scope and inverse scope interpretations to negative sentences with *dake* attached to a dative object and do not show any preference, which is consistent with the Question-Answer-Requirement Hypothesis in Hulsey et al. (2004) rather than the Isomorphism-by-Default Hypothesis in Musolino and Lidz (2006). As for L2 Japanese, it was found that there seem to be L1 effects on the acquisition of Japanese nominative object constructions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
2009 年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
2010 年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
年度			
年度			
総計	1,500,000 円	450,000 円	1,950,000 円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：「だけ」、否定文、母語獲得、日本語児、第二言語獲得、L2 日本語

## 1. 研究開始当初の背景

英語の否定文では主語位置に全称数量詞

(universal quantifier) が現れると否定辞と

の間に作用域の相互作用が起り、例えば

Everyone didn't jump over the fence という文の解釈は「フェンスを越えなかったということが全員について言える」という数量詞が否定辞よりも広い作用域を取る読み（以下、広い読み）と、「全員がフェンスを越えたわけではない」という、全称数量詞が否定辞よりも狭い作用域を取る読み（以下、狭い読み）の両方が可能である。一方、The students didn't solve every problem のような目的語位置に全称数量詞が現れた否定文の場合には、狭い読みのみが可能である。しかしながら、英語の獲得研究を見てみると、子供は目的語位置に現れた全称数量詞に関しては狭い読みを許容するにもかかわらず、主語位置に現れた全称数量詞に関しては広い読みしか許容していないようだとの報告が多く寄せられていた(Musolino (1998)やMusolino et al. (2000) 等)。この理由について、Musolino et al. (2000)は、子供は統語構造に基づいて数量詞と否定辞を解釈しており、構造上高いものが広い作用域を取るのではないかとの見方を示している。

一方、Gualmini(2005)やMusolino and Lidz(2006)は語用論的条件を整えば子供も大人と同様の振る舞いを示すということ、具体的には例えば Everyone didn't jump over the fence の文の前に Every horse jumped over the log but のような肯定文を付け加えた形にすると狭い読みの許容度が増すことを示し、子供が未習得なのは統語的知識ではなく語用論的知識であるとの示唆を行っている。

日本語児の場合については、Terunuma(2001)等で全称数量詞を含む否定文の解釈における含意(implicature)の獲得について研究がなされ、Hattori et al. (2006)では韻律情報が全称数量詞を含む否定文の解釈に与える影響について調べて

いる。

したがって母語獲得研究について、(数量詞のように作用域を取る)「だけ」が含まれる否定文の場合どのような解釈が与えられるのか、幼児と大人で解釈が異なる場合その原因はどこにあるのか、といった問題について引き続き重ねて研究が必要な状況にあったと言える。

また、第二言語獲得研究に関して言えば、否定文の研究は主に否定辞と動詞の語順に着目した形で行われることが多く(White (1992), Yuang(2004)等)、焦点助詞含む否定文の解釈については研究の対象とされることはなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、「だけ」が含まれる否定文に関して日本語児がどのような解釈を与えるのかを明らかにすることである。具体的な研究問題は2つあり、(i) 幼児の与える解釈が階層構造に基づくものなのか、そして(ii) 2つの解釈が可能で大人がそのいずれにも選好を示さない文でも子どもはいずれかの解釈に選好を示すのか、である。また、第二の目的は、主格目的語に「だけ」が付いた否定文に関して L2 日本語学習者がどのような解釈をあたえるのかを調べるための基礎研究として主格目的語構文の獲得に母語の影響が見られるのかを明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

L1 日本語の研究に関しては、上記のいずれの研究問題についても日本語児と大人の日本語話者を対象に Crain & Thornton (1999)の真理値判断タスクを用いた実験を行い調べた。

L2 日本語の研究に関しては、学習者発話コ

ーパス (OPI KY Corpus)を用いて母語が韓国語、英語、中国語の日本人学習者の非主語の格標示について調べた。

#### 4. 研究成果

(1) 日本語は「*pro* 肉だけを食べない」のように「だけ」が目的語に付いた場合（「肉だけではなく他のものも食べる」という）「だけ」が否定辞より狭い作用域をとる読み（以下狭い読み）が可能であるが、「和夫だけが*pro* 食べない」のように「だけ」が主語に付いた場合この読みは不可能となる。この違いは、否定辞が目的語はc統御するが主語はc統御しないことに因るもので、統語的制約が働いていると考えられている。子どもの日本語文法も「階層的」な構造を形成し主語と目的語が構造上区別され、「だけ」の解釈もこの統語的制約に従ったものであれば、「狭い読み」を目的語＋「だけ」の文で容認し、主語＋「だけ」の文で却下するはずで主語・目的語非対照性が見られるはずある。平成20年度はこの予測の検証を行った。

19名（平均6才2ヶ月）の日本語児と20名の大人の日本語母語話者を対象に真理値判断法に基づく実験を試みた。「だけ」のコントロール文について正しい判断をした16名の幼児（平均5歳10カ月）および20名の大人の結果は表1の通りである：

表1. 「狭い読み」の平均容認度と標準偏差

	主語＋「だけ」		目的語＋「だけ」	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
幼児 ( <i>n</i> =16)	0.31	0.34	0.63	0.41
大人 ( <i>n</i> =20)	0.20	0.33	0.83	0.29

被験者間要因2（幼児・大人）×被験者内要因2（主語・目的語）の2要因の分散分析の結果、交互作用が有意傾向であったので、さらに下位検定を行った。その結果、主語＋「だけ」文、目的語＋「だけ」文に関して、共に大人と子供の間には有意差がないことが明らかになった。また、大人に関しては主語＋「だけ」文の容認度が目的語＋「だけ」文と比べ1%レベルで有意に低く( $F(1, 34)=28.19, p<.01$ )、子供に関しては5%レベルで有意に低いとの結果になった( $F(1, 34)=7.05, p<.05$ )。したがって「だけ」を含む否定文の解釈に関して、日本語児も本質的には大人と同様の主語・目的語非対称性が観察されたことになり、幼児の日本語文法が形成する構造も「階層的」であることが示唆された。

(2) 21年度は、目的語位置に「だけ」を含む否定文は2通りの解釈（「だけ」の作用域が否定辞より広い読みと狭い読み）が可能であるが、日本語児が大人と同様にどちらの解釈も与えることができるのかについてに研究を行った。

結果は表2に示す通り、幼児(18名、平均5歳3カ月)も広い読みと狭い読みの両方を容認した。

表2. 目的語位置に「だけ」を含む否定文の平均容認度と標準偏差

	狭い読み		広い読み	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
幼児 ( <i>n</i> =18)	0.78	0.30	0.78	0.42
大人 ( <i>n</i> =18)	0.86	0.33	0.92	0.19

被験者間要因2（幼児・大人）×被験者内要因2（狭い読み・広い読み）の2要因の分散分析及び下位検定を行った結果、子どもと大人の平

均容認度に有意差は見られず ( $F(1, 34)=2.14$ ,  $ns$ )、狭い読みと広い読みの平均容認度にも有意差は見られなかった ( $F(1, 34)=0.12$ ,  $ns$ )。よって大人で2つの解釈に選好が見られない文について幼児も選好を示さなかったことになる。この結果はMusolino and Lidz (2006)の同形読み初期値 (Isomorphism by Default) 説というよりはHulsey et al. (2004)等の問答要件 (Question Answer Requirement) 説と合致すると言える。そもそも焦点助詞「だけ」が含まれる否定文について調べた研究はごく限られており、同じ幼児が曖昧文の2つの解釈のどちらも容認し、選好が見られないという報告もないことから、本研究により重要な知見が得られたことになる。

(3) 22年度は、「だけ」を含む否定文の解釈が L2日本語の主格目的語構文でどうなるかを調べる前段階として、L2日本語学習者による多重主語構文と主格目的語構文について調査を行った。母語が英語・中国語・韓国語のL2日本語学習者の発話コーパスを入手し、分析を行った。(i) 両構文が母語に存在する韓国語母語話者は (他の言語母語話者と比べて) 初級の段階から特に主格目的語の使用が豊富である、(ii) (中級でいったん母語の影響は見えなくなるが) 上級で再度韓国語母語話者の主格目的語の使用頻度が他の言語母語話者と比べて高くなる。ただし、(iii) 主格が標示されるべき非主語に対しての誤った格標示はごく限られたものであることが明らかになった。よってPrévost and White (2000)の表層的屈折欠如仮説 (Missing Surface Inflection Hypothesis) と合致する興味深い結果を得たことになる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① Noji, Miyuki, Children's 'configurational' interpretation of negative sentences with *dake*, 言語研究、査読有、Vol. 140、2011、ページ未定.

[学会発表] (計2件)

① 野地美幸、「だけ」が含まれる否定文の解釈：子供は統語的情報を用いるのか？、日本語学会、2008年6月、学習院大学.

② 野地美幸、日本語児による目的語位置に「だけ」を含む否定文の解釈、日本語学会、2010年6月、筑波大学.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

野地 美幸 (NOJI MIYUKI)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：40251863

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者